

ニヒリズムと系譜学

竹内綱史

ニヒリズムとは一般的に、この世界で生きる意味を欲しているにもかかわらず、世界がそれに応えてくれない、という事態を指す。自己の側における意味への欲望と、世界の側における意味の不在という事態が、同時に起っている状況である。それゆえ、所謂「ニヒリズムの超克」とは、自己と世界との「和解」である。そしてこの「和解」には二つの方向性が存在することになる。一方は、自己の側で、意味への欲望を断念すること、無意味な世界へと自己を合わせるように、自己を変容させること。もう一方は、世界の側に、意味を見いだすこと、世界を意味あるものと解釈し直すこと。自己を世界に合わせるのか、世界を自己に合わせるのか。

かくして、ニーチェ解釈においても、「ニヒリズムの超克」とは、極限的に無意味な世界を受け入れる、すなわち、〈永遠回帰〉を肯定できる自己へと自らが変容を遂げる、という方向性がある一方、世界とは〈権力への意志〉が織りなす解釈の無限の戯れであり、将来に向けて過去の解釈を変更することで、私（というある特定の〈権力への意志〉）が生きる意味のある世界を（も）作り出す、という方向性もある。

当然のことながら、これら二つのニーチェ解釈の方向性は、どちらもそのままでは素朴に過ぎる。自己のあり方と世界の現れ方は、別々に考えられるものではない。「神の死」とは、われわれが神を殺したということなのか、あるいは、神が自らこの世界から退去したということなのか。ニーチェははっきりと前者を語っているように見えるが、ではなぜ、あの「狂気の人」は神を「探して」いるのだろうか（『悦ばしき知識』第125節）。ニーチェは、「神なき世界でわれわれはいかに生きるべきか」と問うているのか、それとも、われわれの世界理解を「神」なきものへ変えようと努力しているのだろうか。

本発表では、ニヒリズムをめぐる以上のような二つの解釈方向の調停を、『道徳の系譜学』（以下、『系譜学』と略）から読み解くことを試みたい。

序文によれば、『系譜学』は以下のような「新しい要求」に導かれている。「われわれは道徳的諸価値の批判を必要としている、この諸価値の価値自身がまずもって問いに付されねばならない——そしてそのために、そこからその諸価値が生い茂り、その下で成長し変遷してきた諸々の条件と事情についての知識が、必要とされるのだ」（『系譜学』序文第6節）。けれども、批判が歴史的知識を必要とすることは、自明ではない。そこには、批判を可能にするような規範性は、歴史にしか根拠を求め得ないことが前提されている。道徳が超自然的根拠を有しているわけではないこと、「恥ずべき起源」を有していることそれ自体は、ニーチェが繰り返しそれに言及しているとはいえ、当の道徳的価値基準を前提にした批判でしかない。そうではなく、『系譜学』は全体として、道徳が批判されざるを得ない歴史的地点にわれわれが到達していることを示すことによって、道徳を批判するのだ。その歴史的地点とは、「教義としてのキリスト教は、自らの道徳によって没落した。かくして今や道徳としてのキリスト教もまた、没落せざるを得ない。——この出来事の敷居に、われわれは立っている」（『系譜学』第3論文第27節）と言われる状況である。

これは「道徳の自己超克」という名高い論点であるが、本発表では、それが「良心」の

問題であることに注目したい。「教義としてのキリスト教」が「没落」したこと、つまりキリスト教の神が信じられなくなったのは、意図的にわれわれが神を「殺した」わけでもなく、神が自ら「退去した」わけでもなく、われわれが神信仰を自分に許せなくなったからである。そのようなことは〈知的良心〉にもとめるのだ。神なき世界で生きるよう私に迫るのは、私自身なのである。良心論を表立って主題としている第2論文のみならず、『系譜学』全体は、そのような〈知的良心〉の発達史を描いている。

では、「道徳としてのキリスト教」はいかにして「没落」するのか。それは、〈真理への意志〉によって育成された〈知的良心〉が、自らに「なぜ私はこの知的良心に従うのか」と問うことによってである。ニーチェによれば、これは良心の本質である自己吟味（自分で自分を監視し責めること）が必然的にたどり着く地点なのだ。そこで明らかになるのは、自己における意味への欲望が、意味なき世界を作り上げたという逆説である。ニヒリズムとは、ある特定の意味への欲望——〈真理への意志〉を偽装した特定の〈権力への意志〉——による自作自演の悲喜劇だったというのである。

本発表では、こうしたニーチェのニヒリズム理解と系譜学という方法との関係を吟味し、第2論文第24節等で語られている良心の未来像を検討したい。それはまた、「生物学主義」とも言われる一見粗雑な自然主義の含意を明らかにすることにも繋がるだろう。